

深尾須磨子のイタリア紀行

——第二次世界大戦勃発前後の「詩」と国際情勢——

和田博文

一 深尾須磨子と「詩の親善使節」

詩人の深尾須磨子がヨーロッパに三回目の旅行を行ったのは、一九三九年三月から翌年一月までの約一〇カ月間である。欧州航路のナポリ経由でローマに赴いた深尾は、五月一七日にガレアツォ・チャーノ外相を訪問し、六月二日にイタリア王国首相のベニート・ムッソリーニと会見した。その間の五月一九日にはリチエウム・ロマノで「今日の日本女性」と題する講演を行い、二二日にはローマ放送局から日本に向けて、「ローマの印象」について話をした。ナポリ東洋大学でも講演を行っている。その後、六月一日にベルリンに赴いた深尾は、パリに立ち寄ってから、再びイタリアに戻り、亡き詩人アントニオ・ベルトラメツリの、フォルリーの旧宅に滞在する。そして一月二九日にナポリを出航した日本郵船の笠崎丸で、帰国の途についた。



イタリアのガレアツォ・チャーノ外相と深尾須磨子（『むらさき』1940年3月）。

深尾須磨子のイタリア紀行は、『旅情記』（一九四〇年七月、実業之日本社）にまとめられている。しかし日本近代文学研究の世界で、深尾のイタリア体験が言及されることはほとんどなかった。その理由は、同書収録の次の詩が象徴的に語っている。「世紀の暴風雨に嘯く一世の巨木／人間にして神なる英雄／ドウチエ ムツ



音楽家のエニオ・ポリノ（『むらさき』1940年3月）。

ソリーニ／我君の足下にをのきて／名無し小草の如く光に酔ふ／光　ドウチエ　ムツソリーニ」。「ドウチエ」とは統帥の意味。この詩はムツソリーニとの会見の際に、直接彼に捧げられている。さらにオットリーノ・レスピーギの弟子で、国立音楽学校教授を務めていた若手作曲家のエニオ・ポリノにより、歌えるように曲も付けられたという。

深尾須磨子のイタリア紀行は『旅情記』の他に、紫式部学会発行の月刊誌『むらさき』に、図版付きで何回か紹介されている。

同誌一九三九年五月号に掲載された「出発」という詩で、深尾はこのときの旅を、「訪ねてゆくのはほかでもない／ダンテの国にゲーテの国／そして天に近いバルナスの山」と歌っていた。ギリシア

神話の「学芸の神」ミューズが住む「バルナス」が登場するように、深尾の旅の目的は、一義的には「詩の親善使節」としての訪問だった。したがってこの詩も、「私は出かけよう／そして愛する祖国日本の名を／詩精神をとほして伝えて来よう」と結ばれる。しかし伝えようとする「日本」が、日伊防共協定や日伊文化協定が成立する時期の日本であったことが、深尾の「詩」を国際情勢と一体化させてしまう。

もちろんそれは深尾須磨子だけの問題ではない。『むらさき』の同じ号に、「詩の親善使節深尾須磨子女史を送る」という記事が載っている。これは三月九日に学士会館で開かれた壮行会の記録で、北原白秋・高村光太郎・長谷川時雨・与謝野晶子ら一〇〇人以上が出席した。晶子の激励歌「深尾夫人を送りて」の一首、「つかはしむきみを桜の夫人としローマの都ゲーテの国へ」は、深尾を「詩の親善使節」と位置付けている。一年前に亡くなった詩人、ガブリエーレ・ダンヌンツィオの墓前に捧げる詩も発表された。しかし同時にムツソリーニやアドルフ・ヒトラーに贈る詩歌も披露されている。そして晩餐後は、ビクター専属歌手の由利あけみが、「防共親善行進曲」や、深尾作詞の愛国歌「白衣の花」を歌った。壮行会の最後は、「愛国行進曲」の合唱で締め括られている。「詩の親善使節」の使命は「国家的」なものであることを、記事は指

摘した。

ムッソリーニとの会見の際に深尾須磨子が抱いた印象は、『むらさき』一九四〇年三月号収録の「伊太利で邂つた人々」に描かれている。「鉄血首相」として知られるムッソリーニも、着物姿の深尾を迎えたときは、「優しく、虚心淡々と詩を語るダンテの後裔」だったと深尾は回想する。「美を愛する頭主」という印象が、深尾の「詩心」を揺さぶる時間だった。しかしそれは会見相手を、国際情勢の世界から引き離し、詩の世界に移行させたということではない。『読売新聞』の記者は二人の会見直後に、ホテル・ロワイヤルに国際電話を入れて取材する。「ム首相と初会見の日本女性」（『読売新聞』一九三九年六月五日）は、深尾が「日本婦人が銃後につとめてゐる」と語り、ムッソリーニが「どんな破局にも詩の心があれば乗り切れる」と応じたことを伝えている。国際情勢と詩は、深尾の心のなかで、明確な境界を失い、相互浸透していたのである。

深尾須磨子『旅情記』は「詩の親善使節」にふさわしく、イタリアの詩人との交流が随所に織り込まれている。すでに亡くなった詩人も含めると、最も言及されているのは、アントニオ・ペルトラメッリの旧宅であるヴィラ・シーザだろう。ペルトラメッリの日本趣味の反映で、ヴィラ・シーザには日本情緒が溢れ、皿や

小鉢も日本製を使っていた。深尾は個人名を出していないが、ペルトラメッリが晩年の二年間を一緒に暮らしたのは、ペルトラメッリ能子である。能子は国立音楽学校でレスピーギから音楽理論を学んだ、三浦環の妹弟子にあたる。当時のヴィラ・シーザの管理者は姉のマリアで、やはり親日的だった。ムッソリーニと会見できるよう、尽力してくれたのもマリアである。ここで過ごした二カ月の間、深尾はフォルリーの自然に包まれた生活を満喫する。

日本でアヴァンギャルドが盛んだった一九二〇年代に、フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティの「未来派宣言」は、平戸廉吉や神原泰に影響を与えた。深尾須磨子はそのマリネッティに、ローマで会うことができる。マリネッティはアカデミー会員で、深尾



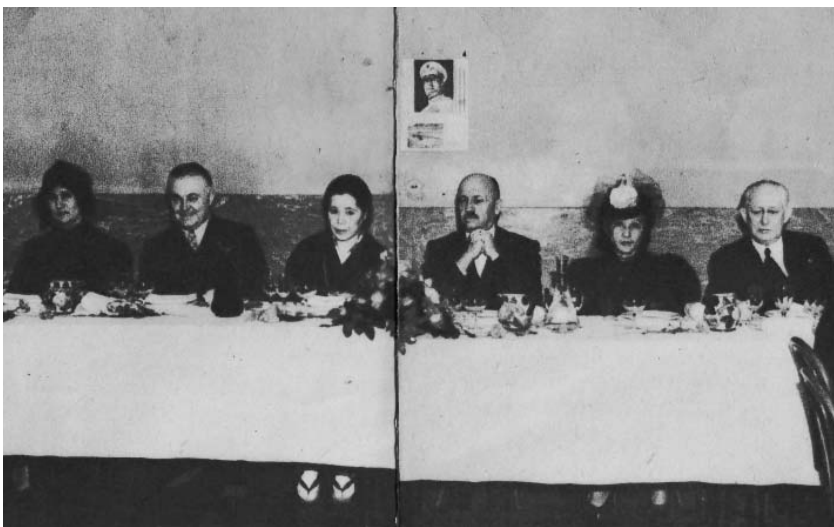
詩人アントニオ・ペラトリメッリの姉のマリアと過ごす深尾須磨子（『むらさき』1940年3月）。



詩人のピアンカ・カファロ（『むらさき』
1940年3月）。

のためにローマ・ペン倶楽部の歓迎会を設定してくれた。情熱的な詩人で、「口を開けば何ものをも焼きつくす、といった烈しい語調で、詩を語り、自作の詩を朗読」したという。訪日の希望も漏らしていた。当時のマリネッティはファシズム運動の主唱者として有名である。

深尾須磨子がイタリアで交流した詩人は、ベルトラメッリやマリネッティのようなファシストだけではない。「伊太利で邂つた人々」で深尾はピアンカ・カファロを、「ファシスト詩人の多くが、その社会機構の中で歌はうと試みるのに比べて、彼女は広く人類の立場から、美を歌ひ、真実を歌はうとする」と紹介している。カファロと親交を深めた深尾は、彼女の結婚式にも出席し、ナポリから日本に向かうときには、彼女に見送られた。カファロは「ス



バンテオン付近のレストラン・ロゼッタで開かれた、ローマ・ペン倶楽部の深尾須磨子歓迎会。左から3番目が深尾。その右がマリネッティ。深尾の左は、ペン倶楽部会長のゴボーニ（『むらさき』1940年3月）。

マコ・フカヲに捧ぐ」という詩を書き、「蒼天いろの詩のきものを
着て／お前の理想のかをりは／お前の心から羽ばたきのぼる音楽
で／お前とお前の人類を愛撫しているやうだ」と歌っている。

ヴィア・シーザで知り合った女性の一人は、ボルヂエーゼとい
うイタリアでは「かなり有名な文学者」の妻だった。『旅情記』に
よれば、彼女の夫は宣伝省からアメリカに派遣され、各地を講演
旅行している。しかしイタリアに対する「反動的言動」が理由で、
故国に帰ることができなくなった。女性も詩人で、「非常に気の毒
な」立場におかれていたが、文筆生活だけは許されている。ムッ
ソリーニの故郷に近いフォルリーで、このような「伊太利の裏面」
を知るのは、自分にとって意義深いと、深尾は記している。

深尾須磨子『旅情記』の問題は、ムッソリーニと会見し、彼の
姿を詩に描いたことではない。第二次世界大戦勃発前後のイタリ
ア体験自体は、文学的なテーマたりうる。ただ深尾の「詩」は、
ファシズムという幻想の共同性に、全面的に覆われている。それ
は一九二〇年代後半のマルクス主義文学が革命に奉仕する役割を
担われ、一九四〇年代前半の国策協力文学が戦争に奉仕する役
割を担われたことと、同質の問題である。その問題は同時期の
他の文学者のイタリア紀行と比較することで、輪郭をくつきりと
させてくる。

二 野上豊一郎の「詩」、野上彌生子の「モザイク」

深尾須磨子がローマに着いた翌月の一九三九年五月一日、『読
売新聞』第二夕刊に「日伊交驛に賑はふ話題」という記事が掲載
された。「文化使節」としてローマを訪問した野上豊一郎が一日
にブランカツチヨ宮殿で「能狂言と能面について」という講演を
行い、同じく「文化使節」としてローマにいる深尾が一九日にリ
チエウム・ロマノで「今日の日本女性」という講演を行うと、同
紙は伝えている。豊一郎は交換教授として、イギリスの諸大学で
能を中心に、日本文化を講義する予定だった。その途上で、小説
家で妻の野上彌生子と共に、イタリアを訪れたのである。『旅情記』
に深尾は、彌生子に会えるのは「うれしい」と書いている。実際
に深尾は、ローマやパリで夫妻と出会うことになる。

野上豊一郎のイタリア紀行は、『西洋見学』（一九四一年九月、
日本評論社）にまとめられた。豊一郎の視線の特徴は、「まだロー
マになじまないうちは、あまりに多く見るべき物があるので、ど
こへ行つても、何を見ても、いつもあたまが混乱して、年代史的
に地理的に整理しながらそれ等を見ようとすることのかなり骨が折
れた」という文章が、よく語っている。彼が視野に収めようとし
たのは、現在のローマの都市景観ではない。都市景観に折り重な

る、異文化間の交通や歴史的記憶を、幻視しようとしていた。豊一郎にとってローマは、それ自体が「博物館」のようなものである。理解して鑑賞するためには、事前の準備が必要だった。

そのことはシチリア島のエトナ山の裾野にある、タオルミナやカタニアでも変わらない。タオルミナには、ギリシア・ローマ・サラセン・ノルマンの各時代の建築物が、ある場合には断片として、ある場合には修復されて残っている。野上豊一郎はそれらの遺跡を通して、古代や中世の生活を読み取るうとしていた。カタニアから一〇キロほど行くと、「ポリプヘーモスの七つの島」と呼ばれる、小さい岩が海上に見えてくる。その先には、アチスという小川が流れている。どちらも紀元前八世紀末の吟遊詩人ホメーロスの、叙事詩『オデュッセイア』の舞台となったスポットである。伝説に彩られた場所で豊一郎は、ホメーロスの幻想を生き生きと甦らせ没入していった。豊一郎にとって「詩」とは、そのような遠い歴史の彼方の幻を指している。

同じ風景を見ている、野上豊一郎と比べると、野上彌生子の目線は低い。歴史の彼方に視線を投じるのではなく、イタリアの現在の姿を観察しようとする。だから『欧米の旅上』（一九四二年五月、岩波書店）には、ムッソリーニが繰返し登場する。ポンペイに通じる自動車専用の立派なアスファルト道路も、集団労働

で拓いたカンパニアの耕地も、労働者の生活改善のために建設された集合住宅も、ムッソリーニが指導した仕事だと、彌生子は記した。ローマのムッソリーニ広場には水浴場がある。そこにムッソリーニ自身が来て泳ぐことが、市民を喜ばせていると書き留めてもいる。

ロビラント伯爵夫人は「世界に於ける母と子の会の会長」、特に「私生児」をもつ母親と子供の保護に尽力していた女性である。一九三九年一月中旬に野上彌生子は、夫人の仕事を見学する機会を得た。ムッソリーニの支持を得て、仕事がいやすくなったと夫人は語る。彼女が経営する幼稚園に行くと、女性教師や子供は全員立ち上がり、右手を高く挙げて「ファシスト式の礼」を行った。続いて大学卒業後の女性を対象とする実習学校に赴く。そこはファシズムの指導者の養成機関で、ここを修了してから、女性たちは工場に赴任し、女工教育に従事するという。夫人が教室に入ると、講義中の教授は最大級の敬意を夫人に示し、学生は一斉に手を差し上げた。

深尾須磨子のようにムッソリーニに会いたいという希望を、野上彌生子はまったく持っていない。「この頃日本から来る人が、誰も彼もムッソリーニに逢はせて貰はうとする」さまざまなエピソードを聞くだけで、面白かったと彌生子は書いている。「日本から来

る人」のなかに、深尾も含まれていた。ところが思いがけないことが起きる。アドリア海沿いのリミニに通じる古ローマの道を自動車で走っていると、乗馬中の三人の男とすれ違う。その瞬間に運転手が、ムッソリーニと叫んだ。その後、ローマ事情に詳しいM氏にそのときの話をすると、プラタナスの並木道が乗馬道として使われているので、ランチ前の軽い運動に來たのだらうと教えてくれた。

イタリアの現在の姿を観察していると、ムッソリーニがしばしば現前化してくる。しかし野上彌生子は深尾須磨子のように、ムッソリーニを神格化しようとしなかった。ローマのサンジョヴァンニで聖クレメント教会を眺めていると、軍服姿の若者を乗せた二く三台のトラックが走っていく。同行していた教授夫人が「示威運動で騒がしいことだ」と口にしたとき、彌生子は「政治は大嫌ひ」と応じている。同意する夫人の舌打ちを聞いて、「生一本な性格」がうれしかったと彌生子は書く。だから深尾の視線と比べると、彌生子の視線は複眼的に見える。ローマの公共の場所に掲げられた、ムッソリーニの肖像と、皇帝の肖像と、キリスト受難像の三つが、現在のイタリアを端的に表現していると、彌生子は考えていた。

ファシズムと宗教は、人々の生活の場所ですら矛盾しない。

フィレンツェのサンジョヴェンニ洗礼堂を訪れたときは、付添の家族や見物人に見守られて、たくさんの子供が集まっていた。大僧正が子供の間を通り抜け、一人一人に祝福を与えていく。こうして育てられる子供が、他方で幼いファシストとして組織されることは、ありえないという思いで、野上彌生子はその光景を眺めていた。ふと横で十字を切っている若い娘の肩掛けを見ると、無数の「Duce」（ドウチエ）という文字が記されている。この世は「ドウチエ」に任せ、あの世は神様に任せて、「呑気にやつて行く術」をイタリア人は心得ていると、彌生子は納得した。

だから『欧米の旅上』にはファシズムに対する一元的な評価は記されていない。道を教えてくれた男性に心付けを差出すと、「私はファシストだから頂かない」と、その男性は辞退した。これは一つのエピソードにすぎない。同時に野上彌生子は、別のエピソードも併せて書いている。馴染みの御者に「ファシストですか」と質問すると、彼は困惑の表情を浮かべて、独り言のように答えた。「私は自由主義者です」と。教会を訪れる客を相手に生計を立てる御者にとって、それは戸惑う問いかけである。「そんな党派なんぞには関係しないで暮らしてゐます」という意味だと、彌生子は解釈した。

シチリア島のパレルモ見物で、野上豊一郎と野上彌生子の興味

を惹いたのは、「古代から交る交るシチリアを支配した民族が遺した遺産の混合物」である。「ギリシア人や、カルタゴ人の侵入、乃至サラセン人、ノルマンの支配から、下つてはガリバルディの独立戦争」というように、「遺産」は歴史的に位置付けることができる。豊一郎がイタリアで「詩」を見出すのは、古代や中世の遺跡で、彼はそこに没入した。しかし彌生子はそれらを「モザイク」と捉え、ファシズムを最新の「モザイク」に加える。だから彌生子は数百年後の旅人の姿を、以下のように想像する。ファシズムが「シチリア的モザイクに与へた政治的文化的断片を、旅人は今日の私たちのやうに探し歩くに違ひない」と。

三 日独伊親善協会と日伊文化協定

野上豊一郎がファシズム出現よりもはるかに以前の古代・中世のイタリアに「詩」を見出し、野上彌生子がファシズムを「モザイク」の一ピースと捉えたことと比べると、深尾須磨子の「詩」はファシズムに侵食されている。しかしそれを深尾個人の問題に還元してしまうと、日本とイタリアの文化交流の時代相は見えにくくなる。『東京朝日新聞』は一九三九年三月一〇日に、深尾の壮行会が前日に、日独伊親善協会の主催で開かれ、北原白秋・茅野雅子・長谷川時雨・与謝野晶子ら、詩壇・文壇人一〇〇余人が参

集したと報じた。また深尾を乗せた欧州航路の箱根丸が、香港に入港する前日の三月二三日には、日伊文化協定が締結されている。日独伊親善協会や日伊文化協定の文脈で、『旅情記』を読み直すと何が見えてくるのだろうか。

左の図版は、壮行会の際の写真で、与謝野晶子と深尾須磨子が並んでいる。次頁の図版は、深尾がイタリアに持参した晶子の色紙と、揮毫中の白秋の姿。共に『むらさき』一九三九年五月号に掲載されている。『読売新聞』同年三月五日の「詩聖ダマヌツイオの墓前に献歌」という記事によると、一年前に亡くなった詩人、



壮行会に出席した与謝野晶子（右端）と、その横に座る深尾須磨子（『むらさき』1939年5月）。



揮毫する北原白秋と、与謝野晶子の色紙（『むらさき』1939年5月）。

ガブリエーレ・ダンヌンツィオの墓前に、「ムソリーニ首相を通じて追慕の詩と歌をおくる」ことになり、島崎藤村・高村光太郎と、白秋・晶子の四人が選ばれた。ダンヌンツィオはファシスト運動の先駆者の一人で、イタリア在住が長い下位春吉とも親しくしていた。晶子の歌は、「君により古代も今も光ある大伊太利亜とこそなりにけり」と書かれている。ダンヌンツィオの墓前を意識しているのが、「君」は彼を指している。

北原白秋はこのとき何を書いたのだろうか。『読売新聞』の記事によると、失明していた白秋は、墨をたつぷりつけた筆を弟子から受取り、絹地にこう記した。「神とある弓矢のまことうやうやしひと度立ちてたじろがめやも」（「神と共にある弓矢の真実は畏れ多いものである。一度立ってたじろぐことがあるうか、そんなこ

とはない。）。そして「東洋平和のために戦つてゐる日本人の気持ちを表すために日本武士道精神を歌ひました」と、記者に解説する。この掛軸はムソリーニに進呈されている。さらに白秋は「ヒトラー総統にも一枚贈つて貰ふことにしました」と言つて、「青雲に直にひづるかふ劔太刀古ありき今もこの道」（「青空に直接響き続ける劔と太刀、かつてのもそうであり、現在も同じであるこの道」と、別の雅箋紙に認めた。二つの歌には、「弓矢」「劔太刀」という武器が織り込まれている。

深尾須磨子の壮行会で、詩歌と国際情勢は緊密にリンクして、切り離すことはできない。それは『むらさき』一九三九年五月号に記載された、深尾使節が持参する謹呈品の目録を見れば明らかである。島崎藤村「千曲川旅情の歌」のイタリア語訳はダンヌンツィオの墓前に、高村光太郎「地理の書」はパウリツチ侯爵に捧げられた。それ以外に、海軍中将小笠原長生（ながはら）のメッセージと写真がムソリーニとヒトラーに、有田八郎外相の写真がチャーノ外相に届けられている。またムソリーニとチャーノ、ヒトラーとゲッベルス宣伝相に渡すようにと、日独伊親善協会発行の矢野征記『防共の話』や伊藤音文『防共読本』、さらに防共記念絵葉書が、深尾に託されたのである。

深尾須磨子を文化親善使節として派遣したのは、日独伊防共協

定と深い関わりをもつ日独伊親善協会である。一九三六年一月二五日の最初の調印時に、防共協定はコミンテルンに対抗する、日本とドイツの二国間協定だった。ところが一九三七年一月にイタリアが参加して、三国間の協定になる。同年一月二八日の『東京朝日新聞』に、「日独伊親善の夕」という記事が掲載されている。三国防共協定の祝賀会が、前日に日比谷公会堂で開かれたというニュースだが、この祝賀会を主宰したのが日独伊親善協会だった。小笠原長生は東郷平八郎に傾倒していた海軍軍人で、協会の会長を務めている。後の一九四一年六月には、対共産圏宣伝グラフ誌で、日本語・イタリア語・ドイツ語併記の『NDI』も同協会は発行することになる。

一九三七年一月一日の日伊防共協定締結は、一年四ヵ月後の一九三九年三月に日伊文化協定を生み出した。国際文化振興会が発行した『日伊文化協定』（一九三九年二月）に、同協定の全文と、外務省の声明が載っている。文化協定の第二条は、「学術、美術、音楽、文学、演劇、映画、写真、無線放送、青少年運動、運動競技等ヲ通ジ両国間ノ文化関係ヲ常ニ増進スベシ」と謳っている。後者によると、日本政府がイタリア政府に文化協定締結の提案を行い、イタリア政府がそれに応じて、調印することになった。重要なことはこの文化協定が、防共協定の延長線上で成立したこと

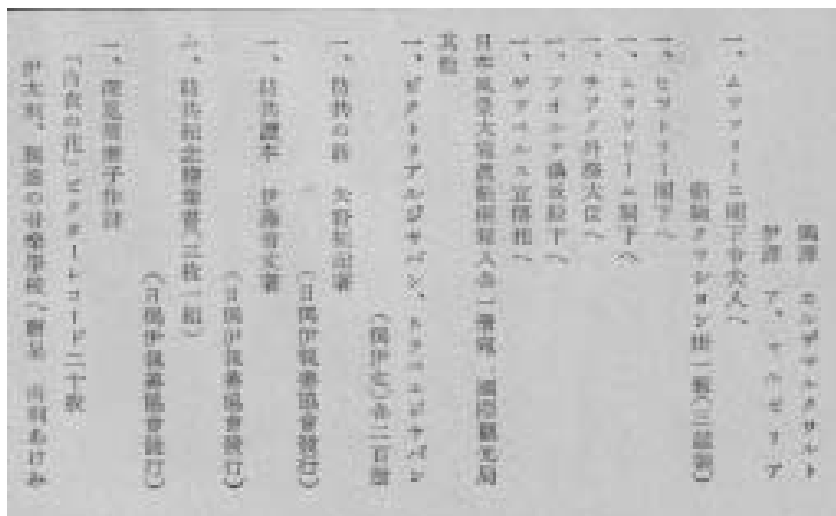
謹呈品目録	
一、ヒットラー閣下へ	
一、ムツソリーニ閣下へ	メツセージ 日獨伊親善協會會長 小笠原長生
一、ヒットラー閣下へ	
一、ムツソリーニ閣下へ	子爵海軍中將小笠原長生閣下肖像大寫眞
一、チアノ外務大臣閣下へ	有田外務大臣肖像大寫眞（額縁署名入り）
一、故、詩聖ダヌンツィオ氏の御墓に	歌三首（色紙）奥謝野晶子
一、故、詩聖ダヌンツィオ氏の靈前に	「千曲川旅情の歌」一冊 島崎藤村
	伊太利語譯ア、マルゼリア
一、パウリツチ侯爵閣下へ	詩「地理の書」一冊 高村光太郎
一、ヒットラー閣下へ	詩掛軸一幅 北原白秋
一、ムツソリーニ閣下へ	詩掛軸一幅 北原白秋
一、詩人ヒウミール氏へ	詩掛軸一幅 北原白秋

深尾須磨子が持参した謹呈品目録（『むらさき』1939年5月）。

である。外務省の説明も、「本協定が防共協定に依つて日伊両国の親善が更に緊密を加へ来り居る今日実施せらるることとなつたのは同慶の至り」と、わざわざ「防共協定」に言及している。

近代日本のイタリア理解や、近代イタリアの日本理解は、必ずしも深いわけではなかった。『日伊文化協定』に収録された「日伊文化の基調」で、美術史家の矢代幸雄^{ゆきお}は、日本の駅の待合室に揭示してある、富士山・松林・渡し舟と高島屋の店名を印刷したポスターが、ヴェネチアの現代美術館の日本室の壁面に、堂々と掛けてあり、「開いた口がふさがらなかった」と述べている。洋画家で小説家の有島生馬も、同書の「日伊文化協定の成立」で、「日本におけるイタリア文学、文化に関する研究は従来何程の成績も挙げてゐない」と慨嘆している。東京外語や大阪外語にはイタリア語を勉強する学生が在籍していたが、卒業後にそれを活かす場は、ほとんどなかった。

ナポリ東洋語学校の講師を務めた美術史家の摩寿意善郎^{ますいぜん}は、同書の「日伊文化交流史の概観で」、日伊文化協定の第二条の冒頭に挙げられた学術交流について、以下のようにまとめている。日伊交換教授制度がスタートしたのは、まだ四年前の一九三五年からにすぎない。第一回交換教授として商法学の田中耕太郎が、一九三六年一月から三ヵ月イタリアに滞在し、ローマ大学などで講演



深尾須磨子が持参した謹呈品目録（『むらさき』1939年5月）。

を行っている。イタリアからは古代幾何学のフランチェスコ・セヴェリが、一九三五年一月に東京帝国大学を訪れ、下位春吉が通訳を務めて、「現代伊太利亜文化」などの講演を行った。また外務省補助団体の国際学友会と、イタリアの中亜極東協会が、交換学生相互派遣を始めるのは一九三六年からである。

もちろんそれ以前にも、個人的なレベルで文化交流は行われていた。テノール歌手のアドルフォ・サルコリは一九一一年以来日して帝国劇場に出演し、原信子・藤原義江・三浦環らを育てている。しかし両国の政府の援助を受ける機会がないまま、一九三六年三月に日本で亡くなった。演出家のジョヴァンニ・ヴィットリオ・ローシーは、一九二二年に帝国劇場に招かれ、歌劇部のオペラ指導者に就任する。その後、浅草にローヤル館を設立して、浅草オペラを開始するが、興行的には失敗に終わる。門下に石井漢・岸田辰弥・高田せい子らを輩出したが、政府の保護がないまま、アメリカに去ることになった。

一九三〇年代後半に国際文化振興会や日伊学会は、日本とイタリアの間の文化事業を推進して、一九三〇年代末に両国政府は日伊文化協定を締結する。しかしそれは摩寿意善郎が「日伊文化交流史の概観」で述べるように、一九三七年七月に日中戦争が開始され、一月に日伊防共協定が結ばれて、「盟邦意識」を強調する

なかでの盛況だった。「此の両三年間に於ける日伊文化の接触交換の事実は夥しき数」に上り、そのすべてを記録することは難しいと摩寿意は述べている。日独伊親善協会が深尾須磨子を「詩の親善使節」として派遣したのは、その渦中においてだった。深尾の「詩」が、ファシズムという幻想の共同性に覆われているのは、単なる個人の選択ではない。それは時代に要請された「詩」の一つの姿だった。

□本稿は、二〇一六年一〇月一日にイタリア東方学研究所・京都外国語大学の主催で、京都外国語大学で開かれた国際シンポジウム「イタリアの発見・イタリアの魅惑―近代日本におけるイタリア像とその変遷」の講演記録である。

(わだ ひろふみ 本学教授)